

# 「アフリカ、そして日本の若者にも稲作を伝えたい」

東南部アフリカで、高収量のアジア稲と病気や雑草に強いアフリカ稲を交配することによって生まれたネリカ米を普及する JICA の支援に携わる坪井達史さん。人呼んで、ミスター・ネリカ」の活躍で、ネリカ栽培は急速に広まり、稲の現地研究者も育ってきた。が、身に付けた稲作の知識を次世代に伝え切るまで、その挑戦はまだまだ続く。



文 = 工藤 律子(ジャーナリスト) 写真 = 篠田 有史(フォトジャーナリスト)  
text by Kudo Ritsuko photos by Shinoda Yuji

## 教えに行つたつもりが、教えられた

「大学の先生は書物の知識しか持たないけれど、ミスター・ツボイは実践的で真に農民の利益になることを教えてくれます」  
坪井達史さんに育てられたウガンダ人研究者は、「ミスター・ネリカ」の素晴らしさを、そう語る。現在、ウガンダの国立作物資源研究所を拠点に「ネリカ米適応化計画」に携わる坪井さんは、JICA 専門家として27年間、アジアとアフリカで稲作を中心とする農業指導を続けて

きた。今や JICA の稲作関係のプロジェクトには欠かせない存在だ。が、そんな坪井さんも、最初から稲のプロだったわけではない。

「青年海外協力隊で、初めてフィリピンの稲作農家に行つた時は、教えに行つたつもりが、気が付いたら教えられていました」と、若いころの体験を語る。  
坪井さんが JICA と出会つたのは1975年、25歳の時。若者がまだ社会主義やヒッピー、異国の放浪にあこがれた時代に、友人と自転車でアジアを旅した大学生は、農獣医学部拓殖学科を出た後、協力隊に応募した。

そしてフィリピンに派遣され、農家でインディカ(米粒が細長い稲の品種)米の栽培に取り組む。

実家も農家で、子どものころから田に出ていたため、コメの作り方は知っていた。しかし、日本の稲作はすでに機械化されており、万事が手作業のフィリピンでの仕事は要領が違った。(稲作の)素人ではないけど、研究者でもなかった」坪井さんは、派遣先で自分の稲に関する知識や技術の不足を痛感し、帰国後、新たな挑戦を決意する。JICA が実施していた2年間の海外研修に応募し、フィリピンの国際稲研究所(IRRRI)で学ぶことにしたのだ。

当時の JICA は、日本の国際協力力の一端を担うという目的に加え、日本の若者に海外で学ぶ機会を与え、日本に貢献できる人材を育てたいという思いで協力隊事業を行っている面が強かった。そこで、協力隊経験者の中から国際機関で学ぶ意欲のある優秀な人材を、年に数人、海外長期研修に出していた。坪井さんはそのメンバーに選ばれ、稲の専門家への本格的な第一歩を踏み出した。

## ネリカとの運命的な出会い

国際稲研究所での研修を終え、文字通り稲の専門家となった坪井さんは、81年以降、JICA 専門家一筋の人生を歩む。インドネシア、フィリピン、コートジボワール、ガーナ：プロジェクト実施国へ赴任して働き、任務を完了すると帰国し、次のプロジェクトを待つ。その繰り返しだ。プロジェクトを待つ間は子どもは学校で、お父さんは無職」と書いていましたよ」と笑う。それでも、稲作の普及を通じて人々の暮らしを豊かにしたいという情熱が、専門家人生を支えてきた。どこへでも同行し、寄り添ってくれた家族(妻と娘2人)の力も大きかった。

自ら選んだ道には、しかし、さまざまな苦労やハプニングもあった。フィリピンでは、耕運機のベルトで手を切り、左手の薬指と中指の先を失った。現地の共産ゲリラに「旧日本軍の財宝を持っている」と勘違いされ脅迫され、一時避難したことも(後に誤解だと分かってもらえ、一件落着した)。イランで

「New Rice for Africa」の略(NERICA)。高収量のアジア稲と病気・雑草に強いアフリカ稲の交配によって開発した稲の総称。国際農業研究協議グループ(CGIAR)傘下の西アフリカ稲開発協会(現アフリカ稲センター、WARDA)が1994年に初めてこの交雑種の育成に成功。現在、陸稲18種・水稲60種が品種登録されている。特長は、生育期間が短く、乾燥に強く、病害虫に対する抵抗力もあること。



小学1年生の時の坪井さん。大分県杵築市山香町の実家の水田で、家族親戚、近所の農家が総出で田植えをしていた(写真提供：坪井達史)



JICA 専門家

# 坪井 達史

Tsuboi Tatsushi

挑戦者たち  
Stories of  
Challengers  
Vol.30



ネリカ研修に参加した協力隊員の若者たちに、わらで縄を編むことを教え、みんなで作った縄をつなげて縄跳びをした。一番元気に飛び跳ねたのは、坪井さん(右から3人目)だった



坪井さんが考案した「ネリカ検定」の認定証。ウガンダの国立作物資源研究所でネリカ研修を受けた協力隊員は全員、3級の認定証をもらった

日本が「稲を通じた国際貢献」を積極的に継続、実施する未来を、坪井さんは夢見ている。



2008年1月、東南部アフリカ諸国からウガンダの国立作物資源研究所に集まった青年海外協力隊員24人を対象に、ネリカ研修を実施した。収量調査に使う稲の高さの測り方、刈り方を指導する坪井さん



2008年1月、タンザニアの研究者と普及員を対象としたネリカ研修をキリマンジャロで実施し、実験結果などの取りまとめや統計処理の方法を、パソコンを使って指導する坪井さん(写真提供:坪井達史)

### 日本の若者にも稲作を伝えたい

は、プライドが高く専門家の話を聞くこととしない現地配属先のスタッフに悩まされた。とはいえ、逆に、心ときめく出来事も。コートジボワールで働いていた92年8月のある日、坪井さんは当時この国に本拠を置いていた西アフリカ稲開発協会(現アフリカ稲センター、WARDA)を訪れる。すると、「たまたま会いに行ったモンテイ・ジョーンズ博士に、『実はアフリカ稲とアジア稲の交配で種ができたんです』と(ネリカの種を見せられたんです)」。博士がネリカの育成に成功し

たのは、2年後の94年。つまり、坪井さんはまだ生まれだてのネリカの種と出会ったのだ。今はバイオテクノロジーの進歩で交配がしやすくなったが、当時は簡単には成功しない研究の「奇跡的成果」だったネリカは、やがて坪井さんをその栽培・普及の第一人者へと導く。

続ける。おかげで本拠地ウガンダでは、ネリカの栽培面積が5年前の20倍以上になった。周辺諸国でも指導を望む声が強くなり、稲作に初めて取り組む地域では、特に根気よく指導を続けている。というのも、こんなことがあったからだ。ウガンダでも最初、農家が作物は耕作地に水がたまると思っ



坪井さんはほかの日本人専門家とともに、土地の条件に応じて、稲を育てるために十分な水分を確保できる利用方法を提案する。傾斜地の場合は、土のうを利用して、棚状の畑を作る作業を指導している

て、注目されているネリカ。その東南部アフリカ諸国への普及事業を始めて、まもなく4年。坪井さんは、細かい雨量調査や試験を通して得たデータに基づき、各地域、各農家の条件に合う栽培や収穫後処理技術などを提供する努力を

役立つものとして、注目されているネリカ。その東南部アフリカ諸国への普及事業を始めて、まもなく4年。坪井さんは、細かい雨量調査や試験を通して得たデータに基づき、各地域、各農家の条件に合う栽培や収穫後処理技術などを提供する努力を

可欠。そう坪井さんは考える。「稲作は(アフリカで広がっている)携帯電話のように急速には普及しない。100年後、みんながお米を食べられるように、今活動しているのです」。坪井さんにはもう一つ、目標がある。それは、「後継者の育成」だ。稲作先進国であるはずの日本に、今後アフリカで、世界で、病気や害虫、土壌障害を含めた稲の専門知識を持つて稲

### Tsuboi Tatsushi

つばい・たつし JICA専門家。1949年大分県出身。日本大学農獣医学部拓殖学科卒業。75～77年青年海外協力隊(フィリピン・稲作)に参加。79～81年JICA海外長期研修制度でフィリピンの国際稲研究所(IRRI)に学ぶ。81年からJICA専門家として、主にインドネシア、フィリピン、コートジボワール、ガーナ、イランに勤務。2003年からアフリカでネリカにかかわるプロジェクトに参加。04年6月以降、ウガンダを拠点として、東南部アフリカでのネリカ米適用化計画に携わる。